米工 MAKERS

米工通信　第　２４７号
令 和 ５ 年 １ ２ 月 １ 日
鳥取県立米子工業高等学校
進路指導部　CA 奥　千絵

「神在月」と良質砂鉄の国「出雲」

全国各地では旧暦１０月のことを「神無月」（かんなづき）と言いますが、出雲だけは「神在月」（かみありづき）と呼びます。この由来は、全国の八百万（やおよろず）の神様達が出雲へお集まりになり、他の地域では神々が留守になるという「神在月」伝承からきています。（今年の神在月は、11 月 13 日～12 月 12 日。）

ところで、出雲と聞くと、普通は島根県東部の出雲市のことを指すと思われますよね。ところが、弥生時代、古墳時代の出雲は、出雲平野、安来平野、意宇平野を中心に栄えており、現在の島根県東部から鳥取県西部にある、出雲から松江・安来・米子方面・伯耆大山エリア等、私たちの学校がある鳥取県西部も古代は「出雲の国」と呼ばれていたのです。

私たちがこれまで学校で習ってきた日本史では、古事記や日本書紀に系譜が記されている初期（古代）については、学術的には後世の創作によるものとみられ、またそれらには、主に出雲神話として古代出雲のことが描かれているため、紀元前７世紀頃以降に実は出雲に広大な王朝が実在したという議論は、長い間、物証がないといった結論になっていました。ところが、近年、出雲大社の境内遺跡から宇豆柱（うづばしら）と呼ばれる巨大な柱が３か所で発見され、荒神谷遺跡（出雲市）・加茂岩倉遺跡（雲南市）からは、全国最多ともいわれる銅剣や銅鐸等が出土されたのです。これらの文研研究や発掘調査例から、邪馬台国以前に出雲に巨大な王国が実在していた可能性が浮かび上がってきたのです。

さて、前置きが少々長くなりましたが、ここからが今回の本題となります。（ここからは若干、「古代出雲王朝考察」が入ってきます）古来、「出雲には黒い川がある」と言われており、現在の出雲の斐伊川の川底や河原には、砂鉄がたまって黒く見える所がありました。出雲王国前期頃は、葦の茎で編んだザルで砂鉄をすくい取っており、のちに竹で編んだ簸（ひ）という道具が作られ、砂鉄をすくう道具として使われていたそうです。出雲山地から流れ出る砂鉄は、真砂砂鉄と呼ばれ、酸化チタンなどの不純物が少ない最良の品質だったと言われています。製鉄には火力を強くするために風を送る必要があります。風を起こす装置がまだなかった古代には、自然風を使っていたものと考えられます。奥出雲の北風が強く吹きつける山の傾斜地に深い穴でできた野ダタラの跡が残されており、火が焚かれ、木炭と砂鉄が交互に入れられ、タタラ横の穴から強風が吹きこまれると 800 度まで加熱されていたと考えられます。底に固まったケラ（底にできる鉄塊）が取り出され、それは上質な可鍛鉄で刃金の材料となりました。（可鍛鋳鉄は鋳造性が良く強靭な性質を持ち、複雑な鋳物を造ることが容易で多量生産が可能となる）出雲族は、その鉄でウメガイと呼ばれる両刃の小刀を作り、石器より切れ味があったので各地の豪族から好まれ広く流通していたとされます。　※参考文献/出雲王国とヤマト政権　富士林雅樹著 大元出版

古代出雲王朝時代からものづくりの精神を現代に伝える「たたら製鉄」。そのたたら製鉄が唯一残るのが島根県仁多郡奥出雲町です。国の重要文化財である日本刀をつくるには、たたら製鉄によって生み出される玉鋼が欠かせません。「たたら」の技術を保存伝承し、玉鋼の安定供給のため、通称、日刀保と呼ばれる伝統技法の保存協会が文化庁の支援を受けてたたら製鉄を復活させ現在に至っています。日刀保に携わっておられる養成員の中には、本校から卒業生を大変多く輩出している、日立金属安来工場（現プロテリアル安来工場）の社員の方もおられました。現在の村下（ムラゲ）と呼ばれる国選保存技術保持者の方もかつての日立製作所（日立金属安来工場→現プロテリアル）にて特殊鋼製造に携わっておられました。　※鉄の道文化圏推進協議会事務局 HP より一部引用

「ヤスキハガネ」。かつての古代出雲からのたたら製鉄の系譜を受け継ぐ日本最古の歴史と伝統を保つ鋼。株式会社プロテリアル安来工場、株式会社プロテリアル安来製作所、株式会社守谷刃物研究所など、たたら製鉄にルーツを持ち、鉄と深く関わり、鉄とともに発展してきた会社は山陰にもまだまだあります。そんな後世に残したい技術を継承していく企業で活躍されているのが、米子工業高等学校のみなさんの先輩方です。

山陰地方が誇るたたら製鉄の技術が後世までどうか末永く続きますようにと、今年の神在月に思います。この度は、進路指導ならぬ神路指導となってしまいました。